

英語学習難易度の階層に関する一試論

— 比較対照分析の観点から —

広島大学大学院 山田 純

1 比較対照分析の立場

英語学習難易度の階層の設定は英語教育学に一つの貢献をすることは疑う余地のないことであろう。それに対する一つの試みとして戦後、比較対照分析が注目されるようになった。以来、外国語教育に於ける対照分析の位置に関する夥しい議論が展開されて来たが、それらは三つに大別出来る。第一は R. Lado のように対照分析を学習難易度設定の中心的基盤とする主張であり、第二は G. Nickel のように対照分析をその設定の一要素としながらも更に言語学、心理学、教育学等を含めた学際的な研究の必要性を唱えるものであり、第三は J. W. Oller, Jr. のように対照分析は全く不適当と排斥する考え方である。ここで言語教育は「言語」と「その教育」との密接に関係する二つの主要素から成ると考えるならば、第一の主張は前者に、第三の主張は後者に力点を置き過ぎていたという見方が大雑把ながら出来るであろう。事実、二ヶ国語を比較対照し、類似点、相違点を明確に分類しても、その相違の度合によって難易度は必ずしも規定出来ないと言える。即ち、対照分析は潜在的可能性をもって難易度を提示してくれるが、実際の学習では心理学的な或いは他の様々な要因が作用してくるからである。この点に於いて第一の主張には賛同出来なくなる。しかし、現段階では対照分析は十分に成熟しておらず、今後研究の余地が大いに残されている以上、第三の主張のようにそれを全く不適当と断定するのは時機尚早と言わざるを得ない。ところで、W. M. Rivers はこの第三の主張に近い考え方をしているが、次のように述べている。「教育的見地から、難易度は理論的分析による基準とは異なった基準によって評価されなければならない。理論的に学習困難と考えられる構造も学習者が頻繁にそれを練習出来る場面の中にたやすく転移出来る時、実際には余り難しくないとすることもあり得る。」しかし、彼女はその「異なった基準」とは具体的にはどんなものであるのか論じていない。我々の知りたいものは正にこの「異なった基準」であるが、現状ではそれを把握することは出来ない。故に、対照分析を第一段階として理論上の難易度を設定し更に学習理論等を加味して最終的な学習難易度の階層を構築してゆくべきであると考ええる。この意味に於いて、R. P. Stockwell 等の有名な「難易度の階層」は種々の批判或いは彼自身の反省にもあるように十分なものではないにも拘らず、今後の一つの指針となる有益なものとして評価されるべきであろう。

しかし、以上言及した議論の中で何れも「難易」とは何かということ限定していない点の問題を一層複雑化させている一因であると思われる。つまり、各々「読み」「書き」「話し」「聞く」四技能によっても学習難易度が異なってくる場合が考えられる。従ってここでは、やや莫然としているが、母国語による説明を与えて学習者が理解出来るまでの時間が長ければ或いは誤解し易ければ、「難しい」とするということを前提として論じてゆく。

2 一般的学習難易度階層の構造

前節で述べた立場を推進してゆく為には、まず言語間の問題に関する全体的な学習難易度階層の構造を概観し、対照分析との連関を明確にしておく必要がある。まず最初に、目標言語自体が内蔵する困難さと母国語干渉による困難さとを区別しなければならない。(Nickel (1971) 参照。)勿論、経験的には両者は概して重なっていると思われるが、これも両言語の使用に関して対照させ

てよりははっきりと具現してくるであろう。例えば日本人にとって英語のある領域は学習が容易であるが英米人の子供にとっては難しいという場合も考えられる。或いは日米人に共通困難さを持っている領域も考えられる。例えば英語の相や法等の一部は英米人にとっても学習が難しいことがしばしば指摘される。これらのことも踏まえて更に全体的で抽象的にこの問題を論じようとするれば、言語には様々なレベルや領域があり、或る程度普遍的な難易度の階層があるということに注意しなければならない。例えば A. G. Sciarone は概して形態の相違よりも意味の相違の方が学習困難であることを経験的に述べている。これは前者はより具体性をもっていること、つまり直接視覚に訴え刺激が大である為であり、後者は抽象性が高いということにあると思われる。或いは音韻レベルは統語レベルよりも学習が容易であると言われているが、Nickel (1971) はそれに対して次のような解釈を与えている。「統語的複雑さに接するよりも音韻的体系に接する方がより『直接性』がある。又統語論は音韻論にも関わっているが、逆は成り立たないことを考慮しなければならない。つまり統語論では意味論や形態論等も含めた幾つかの現象に注意が払われなければならない。一度に数個の点に注目することは、或る音の発音のように一個に注目するよりもっと困難を呈する。」このように凡その普遍的な階層が対照分析と平行して設定されるならばより有効であろう。とは言え現状では研究不十分な為、両者の兼ね合いを規定することは非常に難しいと言わなければならない。

ここでもう少し両者の関係を明らかにすると、例えば英語の或る言語単位は日本人にとって音韻レベルでは難しいが統語レベルでは容易に習得される場合があり得るという点に注意しなければならない。その場合、混乱してはならないことは、これは一万では音韻、統語レベルのいわば縦の難易度と他方音韻レベル内の横の難易及び統語レベル内の横の難易の比較であるということである。例えば縦軸に於いて下から音韻レベル5、統語レベル10、意味レベル15、と順に難易度が増してゆき、他方では各々の系列に於いて同様の割合で X5、Y10、Z15 という範囲があると仮定してみよう。そして或る言語単位は音韻レベルでは Z に属し統語レベルでは X に属すとすると音韻的難易度は $75(5 \times 15)$ 、統語的難易度は $50(10 \times 5)$ となって前者が後者より困難であるということになるのである。そして各々の横の系列が対照分析が導入されるべき領域であると考えられる。勿論、この系列には他の様々な要素も導入され得るであろうが、そうすると横の系列も多次元的な構造を持つようになろう。従って全体的な構造を考えると、直方体に喩えることが出来よう。即ち、一側面の底辺を軸に縦に音韻、統語、意味、語用レベルと高くなり、その面に目標言語自体の難易度を示させ、それに接する側面に母国語からの干渉による難易度を示すことが出来る。但し統語論と意味論或いは意味論と語用論等明確な境界線を引けない場合もあり、難易を示す緯線は起伏のある曲線となって表わされるであろう。そしてその両者の兼ね合った統合的難易度は軸となる底辺からの距離となり、その直方体の内部に位置することになる。これが単純化、抽象化した学習難易度階層の全体構造であるが、それに基づき次節でやや具体的に考察してゆく。

3 語彙学習難易度の物差し

さてここでは意味論の系列を中心に言語単位を語彙に限定して一考察を試みるが、まず次の三点について断わって本節の考察領域を限定する。第一にここでは二言語を比較対照的に捕えた対応関係によって難易度を規定しようとするものであるが、前節で述べた言語自体の普遍的な難易、即ち語彙の場合はその意味素性の抽象性と複雑性であろうが、それらは考慮しない。第二点は学習という本来通時的な過程をいわば共時的な観点から捕えようとするものであり、従って学習項目の提示順序等は考察しない。最後に当然のことながら語の明示的意義を対象とし暗示的意義や文体上の間

題等は無視する。

さて J. B. Carroll は収斂現象（母国語で二つ以上の記号の指示物が目標言語でそれより少ない数の記号で表わされる現象）と分散現象（前者の逆で、目標言語が母国語よりも多くの記号とそれに呼応する意味区分を持っている現象）について論じている。これは斬新な概念ではなく従来外国語教師には多分に認識されている事象であろう。例えば日英語について日本人の立場から見ると前者には「ミズ・ユ」= "water"、後者には「アシ」= "foot・leg" が挙げられよう。しかしそれと学習の難易を関連付けた点が注目される。即ち彼は次のように述べている。「分散的相違の学習は恐らく収斂的相違の学習よりも困難であろう。何故なら前者では選択反応がなされなければならないが、後者では単に解釈反応のみしか必要としないからである。」しかしここで注意すべきは各々対応する意味特徴が加不足無しに対応する場合とそうでない場合があるということである。例えば英語の "take" に対して「取ル・捕エル・買ウ・理解スル」等が対応し得るとしても日本語の各々の意味特徴の総和は "take" の意味素性よりも大きくなると考えられる。そして実際には対応する各語の意味素性は錯綜している場合が圧倒的に多いと思われる。以下では加不足無しの対応関係を考えるが、その場合でも意味特徴が明確に規定出来ない場合は除外しなければならない。例えば上例の収斂現象「ミズ・ユ」= "water" を考えると「ミズ」は「普通には熱くない液状のもの」（岩波国語辞典）であるが、「熱くない」という相対的な意味特徴の為、対応関係を誤る可能性に気づく、例えば、"lukewarm water" は「ナマヌルイミズ」又は「ナマヌルイユ」と対応し得るが、"hot water" は「アツイミズ」とはならない。この場合、教師が同じ程度に説明したとしても学習者の側では片寄った受け取り方をすることがあるということも考えられる。更には意味区分が異なる以上、当然それに応じて "water₁(=ミズ)" と "water₂(=ユ)" の頻度や分布の相違も関与して来るが、これは学習の手順が関わるので考察から外す。要するに Carroll の陳述は上述のように意味が錯綜している場合や意味特徴が明確に区分出来ない場合は当てはまらぬと思われる。そしてこの意味の錯綜等を解明してゆくことが理論的対照分析の課題である。ところが上述の場合を除くと Carroll の言葉によって学習の難易度を規定出来るであろう。即ち上に述べたように分散的相違は解釈と同時に選択をも必要とするので収斂的相違よりも学習が困難となるのである。（これは学習者の仕事量に大きく関与していると言えよう。）これは更に敷衍出来、一般にこの領域に於ける学習難易度の物差しの基準となると考えられる。即ち以上の条件の下で二ヶ国語の対応関係を考えてみると、ゼロ対ゼロ、ゼロ対一、一对ゼロ、一对一、一对多、多対一の六通りが基本的に設定出来る。ゼロ対ゼロの対応関係は当然のことながら考慮する必要はない。又、一对ゼロつまり或る指示物に対して母国語では或る記号を持つが目標言語では表出されない場合は基本的には学習する必要はないので難易度ゼロとすることが出来る。（ところが実際には表出しないこと、即ちその指示物には着目しないということも知る必要性が生ずる場合もあるが、ここではそれは考慮しない。）これは一对ゼロも二対ゼロも変らないので一般にN対0としてよい。一对一の対応は解釈・選択の必要はないので最も難易度は低いと言えよう。次に多対一については例えば三対一の対応の方が二対一よりも解釈の量が大である為、より難しくなる。又、一对多の関係を於いては一对三の対応の方が一对二の対応よりも選択の程度が大なのでより学習困難となる。最後にゼロ対一はこの中で最も難しいものとなる。以上を図に示すと次のようになる。

これは上述の条件の下での対応関係であるが、例えば理論上充分想定される二対三の対応関係はこの物差しの何処に位置するかは、他の要因も関わってくると思われるので規定出来ないことになる。しかしこの物差しは一つの基本として考えてよからう。

ここで他の物差しとこれを比較してみると面白いことに気づく。 A. Afolayan はヨールバ語

The scale of difficulty in learning lexemes

0	1	2
N vs. 0	1 vs. 1	2 vs. 1, 3 vs. 1, ..., N vs. 1

3	4
1 vs. 2, 1 vs. 3, ..., 1 vs. N	0 vs. 1, ..., 0 vs. N

と英語を対照させ、ヨールバ人が英語を学習する際の難易度を五つに分けている。即ち、「1. 目標言語と母国語二言語の体系や構造が完全に対応する場合。2. 二言語の体系や構造が完全に異なっている領域。3. それらが少し異なっていてヨールバ語が英語で為されない細かい区分をしている領域。4. それらが少し異なっていて英語がヨールバ語では為されない細かい区分をしている領域。5. それらが部分的に異なっているが、複雑に入り組んだ対応でヨールバ語の体系や構造が誤って英語と呼応される領域。」に分け、1、2……の順に学習が難しくなるとしている。彼の言う「体系や構造」は何を指しているのか必ずしも判然とはしないが、我々の物差し1. 2. 3. に対して各々彼の1. 3. 4. が対応して同じ順序を呈している。我々の物差しでは彼の5に対応する対応関係は条件として外した。又、彼の2は我々の4と類似しているが順序が異なっている。これは彼の言う「体系や構造」が形態的なものを指していると考えると我々の物差しと矛盾しなくなる。即ち、彼の2に関しては形態上の相違が大であれば、母国語との関連付けがなくなること、つまり母国語からの正・負の転移がなくなること、更には学習者への刺激が大となること等によって学習が比較的容易になるということが推測されよう。しかし一般的にそれらが当てはまるとすることには疑問が残る。他方我々の物差しは意味構造の対応関係に関するもので、上に述べた推測は出来ず、4が最も難しくなるということには頷けよう。従ってこれらは少なくとも意味レベルと形態レベルでの学習難易度の物差しの単位或いは順序は異なってくる可能性があることを暗示していると思われる。以上、まとめると、彼の5に関しては「非常に複雑に入り組んだ」というような非常に大雑把な言葉を困難さとして取り換えただけであると思われるが、彼の2や5の位置付けは更に厳密な研究が進むまでは為されないであろう。

4 今後の課題

以上この小論では抽象的で単純化した条件の下で学習難易度の階層及び語彙学習難易の物差しを仮設したが、今後様々な要素を加味しながらより現実に即したものを作ってゆかなければならない。借用語、頻度、分布、或いは文体的な問題、更には社会学的な問題と、無限にその輪を広げてゆきそうである。しかしながら今後の研究によっては、その上限を何とか規定して対照分析を行なってゆくことは不可能であると思われる。即ち究極的には無限の言語材料の難易度を無限に細分化してゆくのではなく、意味ある標識を有限内に規定し、単純化、体系化してゆくことであると思う。

REFERENCES

- Afolayan, A. (1971) "Contrastive Linguistics and Teaching of English as a Second or Foreign Language" ELT 25.
- Bendix, E. (1966) Componential Analysis of General Vocabulary. Mouton.
- Carroll, J. B. (1963) "Linguistic Relativity, Contrastive Linguistics, and Language Learning" IRAL 1.
- Di Pietro, R. J. (1971) Language Structures in Contrast. Newbury House.
- James, C. (1971) "The Exculpation of Contrastive Linguistics" in Papers in Contrastive Linguistics ed. Nickel, G.
- Lado, R. (1957) Linguistics across Cultures. Ann Arbor.
- Leech, G. N. (1974) Semantics. Penguin Books.
- Lehrer, A. (1974) Semantic Fields and Lexical Structure. North-Holland.
- Nickel, G. (1971) "Variables in Hierarchy of Difficulty" in Working Papers in Linguistics, Univ. of Hawaii, III. 4.
- Nickel, G. (1972) "Binleitung: Zum heutigen Stand der kontrastiven Sprachwissenschaft" in Reader zur Kontrastiven Linguistik. Hrsg. Nickel, G.
- Oller, J. W. Jr. (1971) "Difficulty and Predictability" in Working Papers in Linguistics, Univ. of Hawaii, III. 4.
- Rivers, W. M. (1968) "Contrastive Linguistics in Textbook and Classroom" in Monograph Series on Language and Linguistics 21. ed. Alatis, J. E.
- Sciarone, A. G. (1970) "Contrastive Analysis --- Possibilities and Limitations" IRAL 8.
- Stockwell, R. P. (1968) "Contrastive Analysis and Lapsed Time" in Monograph Series 21. ed. Alatis, J. E.
- Stockwell, R. P., Bowen, J., and Martin, J. (1965) The Grammatical Structures of English and Spanish. The Univ. of Chicago.